

# 学んだ知識を定着させ、活かす授業実践

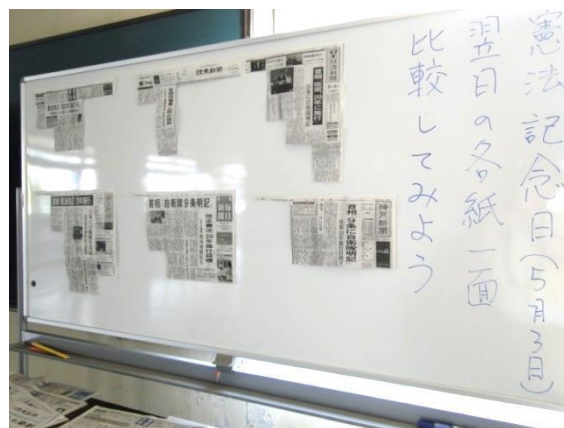
兵庫県立加古川北高等学校 校長 赤松 久美子  
教諭 植山 正彦

## 1. はじめに

本校は全校生徒 950 人を超える大規模校であり、今年度で創立 40 周年を迎えた普通科単位制高校である。1 年次を調査したところ、家庭での新聞購読率は約 50% である。そのうち新聞を手にして読んでいる生徒は約 8% ぐらいであり、新聞を読む習慣がほとんどないのが現況である。実践 1 年目のテーマとして、まずは新聞に触れる機会をつくり、情報をとらえる機会を与え、今学んでいることがどのように実社会で活かされるかを実感させることが大切であると考え実践を行った。

## 2. 新聞の設置場所

本校の多くの生徒が通行するピロティに 6 紙を設置した。机の横にホワイトボードを置き、1 面の記事を紹介し、読み比べを行えるように掲示し、興味付けを行うなど工夫して設置した。まだまだ数は多くはないが、新聞記事に目を通す生徒が見受けられた。



設置と整理は地歴公民科の教諭が行い、社会科教室に保管した。

## 3. 実践内容とその成果

授業や総合的な学習の時間を利用して、次のような取り組みを、地歴公民科が中心に取り組んだ。

### 実践1 新聞ミニ解説

現代社会の授業の最初に、学ぶ単位に関する新聞記事を紹介し、解説をすることで、これから学ぶ単元の導入とした。

紹介した記事

- ・核禁止条約における日本の不参加
- ・日米首脳会談
- ・フランス大統領選挙
- ・憲法改正議論
- ・衆議院解散・総選挙
- ・特別国会（内閣総理大臣の指名）
- ・シリア内戦など

新聞を使うことでNIE活動のPRにもつながり、簡単な解説を加えることにより、学ぶ単元の理解にもつながった。

## 実践2 学んだ知識を定着させる取り組み

定期考査後に、定期考査で学んだ分野の新聞をピックアップし、班になって学んだ分野の復習と、学んだ用語の意味を確認しながら読み進め、記事の要約を行い、どのようなことが分かったかを発表した。

手順1. 現代社会の授業で学んだ経済分野に関する記事を探してスクラップする。

手順2. スクラップした記事を読み、授業で学んだ用語等が出てきたら意味を確認し、この記事は何を伝えようとしているかを要約する。

手順3. ワークシートに要約した内容を書き込み、簡潔に黒板にまとめ、発表する。

このような手順で2学期中間考査後と期末考査後の2回を数クラスで実施した。特に期末考査後の授業では、経済の授業を総括して「景気が回復してきていると言われていたが、なぜ実感がわかないのか？」という問いをなげかけ、新聞から読み取り要約させて発表させた。



授業風景



NIE教育実践  
授業で学んだことを新聞で深めてみよう

班員の名前

9		
班		

1. 配布された新聞を読み、授業で学んだキーワードを取り上げ、その記事に何が書いてあるかを要約してみよう。

授業で学んだキーワード

資料番号 ②	キーワード 株主総会
-----------	---------------

要約

欠陥エアバッグのリコール問題で経営が悪化し、民事再生法の適用を申請したカタは27日、定時株主総会を開いた。民事再生では100%減資を実施するケースがほとんどで、株式の価値はなくなる可能性が大きい。高田会長兼社長は「長年支えてくれた株主にご迷惑をかけて申し訳ない。法的整理を理解いただくようお願いする」と話したが、株主からの反響もあり、2018年3月までに引責辞任することを表明した。

2. 近年、景気が回復しているといわれていますが、普段の生活の中ではあまり実感できません。それはなぜでしょうか？配られた新聞の内容を総括して考えてみよう。

- ・節約志向（少子高齢化に伴い、将来年金がもともとももらえないのではという不安から）
- ・企業が将来のために、内部留保するので、給与があまり上がらず景気が回復している実感がわかないため。

生徒が用いたワークシート

※生徒が探した経済用語

経済成長率 内部留保 株主総会 国内総生産 自己資本比率 M&A など

・生徒の反応と成果

生徒は新聞を通じて、自分たちが授業で学んでいることが普段の生活の中で使われ、経済に関する出来事やその問題点が伝えられていることを実感できたようである。また、ただ授業で学んだ用語を受験のために使うというのではなく、生きた知識として獲得できたことで、経済への関心が高まったように感じた。

## 実践3 新聞から探る世界の諸問題

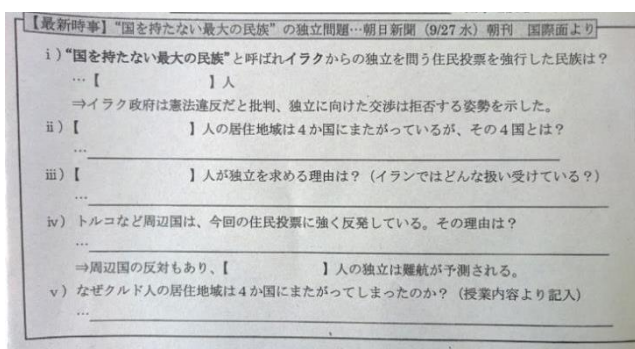
世界史Bの授業で第一次世界大戦を学習した際に、『クルド人の独立運動』に関する新聞記事を提示した。居住地域が複数の国家に分断され、各国でマイノリティとして政治的・経済的に厳しい境遇に置かれるクルド人が独

立を求めていることを記事から読み取らせ、そのような状況に陥った歴史的背景について授業での学習内容から考察させた。

#### ・生徒の反応と成果

新聞記事を活用した授業を通じて、第1次大戦期に行われた英仏の多重・秘密外交の結果、民族分布を無視した国境線が設定されたことが現在に至る中東の民族問題を生み出す元凶となっていることを生徒たちが学び取るとともに、学期末の授業アンケートで「現代の国際社会を理解するためには世界史学習が必要であると実感した」との感想がみられたことは大きな成果であった。

#### ワークシート



授業風景



## 4. その他の実践

### ①N I E講演会

兵庫県N I E推進協議会の記者派遣事業の一環で、毎日新聞姫路支局の田畑知之支局長を本校に招き、1年次生 320人を対象とする講演会を実施した。田畑支局長は、生徒一人

ひとりに講演会当日の朝刊を配布して新聞の読み方をレクチャーしたり、新聞記者の仕事について話したりされ、生徒たちは熱心に耳を傾けていた。講演会のなかで田畑支局長が最も強調したのは、新聞記事はニュースソースをできるだけ文中に明示しているということであった。生徒たちにはニュースソースを示さない情報は「フェイクニュースではないかと慎重に読み進めよう」と呼びかけ、「ニュースや情報を読み取る力を育てよう」と訴えた。



講演会風景

### ②要約練習

総合的な学習の時間や夏季補習の時間を利用して新聞記事を読み取り、要約するトレーニングを実施した。

### ③「新聞づくり」の取組と成果

2年次の日本史Aの授業では、夏季休業中を活用して「新聞づくり」を行った。日本史Aの授業で扱う日本の近現代史をテーマに、各自で調べ学習を行い、新聞の形式でまとめさせた。その内容は、必ず教科書や資料集に掲載されていない事項を調べてまとめることを条件とし、生徒たちは書籍や情報機器を活用して、新聞の作成に取り組んだ。

生徒たちが「新聞づくり」から学んだ点は、言うまでもないが、情報を発信する以上、その内容は正確を期さねばならず、記事の裏付けをとるということである。インターネット上には

情報があふれているが、歴史の記述についても何が根拠となっているのかということを考えるよい機会となった。

また「新聞」である以上、読みやすいことが大事であり、生徒たちは実際の新聞を見ながら文字の大きさや強調の仕方を工夫し、着色にもこだわっていた。また文章の表現方法も読者にわかりやすいように、平易な言葉や表現などを用いて説明するなどの努力が見られた。さらに地図や絵、表を活用し、文章以外の表現方法も情報伝達に大きな役割を果たしていることを「新聞づくり」を通して学んだ。

これらの生徒たちの中には、すでに中学校で「新聞づくり」を体験していた者もいた。だが高校生として歴史の学習を行い、知識や教養を高めた上で、情報を発信するための媒体として「新聞」をつくるという作業は、一方で情報の受け手として、情報発信者の考えや意図などを考える機会にもなった。特に日本近現代史は、戦争の呼称を一つとっても、論争になっていることが多く、「太平洋戦争」や「大東亜戦争」という呼称がどういった意図や経緯で使用されたかということや、その歴史的事実にも様々な見方や考え方があることを知る機会となったと考える。

今後、この「新聞づくり」を活用した授業の展開も模索していきたい。



ピロティに掲示した新聞

## 5. 今後の課題と展望

実践校の指定を受け、新聞を使って本校の生徒の知識や教養を高め、表現力を高めることを目標にスタートした。しかし、新入生に新聞を見せても、記事を最後まで読むことができないし、何が書いてあるか理解できない。そして何といても新聞に興味がない現実を突きつけられた。この現状を受け、まずは新聞に触れる機会を多く作り、学んだ知識を生かしながら読み進めることを基本姿勢として、上記のような実践を行った。生徒たちは普段の授業とは違う教材を使って、班員とコミュニケーションをとりながら行う学びに多少戸惑いながらも、しっかり取り組むことができたと感じている。今後とも「主体的で対話的な学び」を大切にしながら工夫を重ねていきたい。

課題としては、新聞による実践が「点」で行われ、どうしても「面」としての継続的、多角的な実践ができなかったことである。今年度の実践は地歴公民科の教員を中心に実践を行ったが、入試に関わる科目の授業では、多くの時間をNIE実践に使うことができず、考査終了後の授業や総合的な学習の時間など、わずかな時間を使って実践を行わざるを得なかった。次年度は実践を行う期間や授業内容を精査し、他教科の教員とも連携・協力しながら継続的、多角的な実践を行うことが大切であると考えている。来年度は実践2年目となる。1年目の課題をふまえ、新聞を有効活用できるよう努力を重ねていきたい。